



聴覚障害者の豊かな暮らしを考える 山城研修会(暮らし研修会) in 相楽 令和7年 1/26 (日)

テーマ 「難聴児について学ぼう！」

会場：精華町地域福祉センター かしのき苑

「速報」は大きな行事や出来事を
皆で共有する為に発行します。

発行：令和7年4月
山城ネット(情宣チーム)

～どこで暮らしても
より良い療育・教育を
受けるためには～

(一社) 京都府聴覚障害者協会
副会長 内川 大輔氏



内川大輔
と申します。



～医療 ⇄ 療育 ⇄ 教育 切れ目のない支援を～

新生児スクリーニング検査 → 難聴の早期発見
これは医療の分野。

障害があるこどもたちの成長には「療育」と幼稚園と小中高という学校の「教育」が必要となる。

しかし現状は「医療」「療育(福祉)」「教育」という縦割り行政の中で切れ目が生じ、早期相談等を含めた支援が分断されている現実がある。

この切れ目をなくすために自民党の難聴対策推進議員連盟の提言がなされた。

聞こえない・聞こえにくいことがわかった時に聴覚補償として読話・口話・指文字・手話・ジェスチャーなど、限定されずにコミュニケーションの方法を選ぶことは必須である。

最初に関わる医療現場では人工内耳を勧められるケースが多い。療育でも言語聴覚士が残っている聴力を生かした指導方法をとるケースが多く、人工内耳を勧められる。

つまり、人工内耳が合わない → 次の手段 → 手話を覚える、という考え方だ。

● ! 違う ! ●

手話も一つの方法としてとらえるべき。

新生児スクリーニング検査を受けるこどもは少しずつ増えている。しかし、検査に公費補助が出るところが増えてきたが、補助率にばらつきがある。

行政の補助が有る所、無い所、バラバラ。
保護者の負担なく、早期発見 → 保護者が早期に

相談支援を受けられることによって、継続的に療育を受けられることに繋がっていくことが大切。
相談できる場もほとんど無い。

切れ目のない支援を受けることができる様、
保護者への情報保障が大切。

～何が必要なのか 言い合える関係作り～

令和4年、京都は「手引き」を作った。法人代表として私も関わった。

府立ろう学校の舞鶴分校は生徒が広域にわたり、通学には福祉課のサービスを利用している。本来の通学環境は教育委員会が整える責務となっている。

特別支援学校は府内にたくさんあり、送迎バスもある。ろう学校は府内2ヶ所のみで、こどもの数は少ないが、通学環境のあり方を改善し、どの学校へも通学できる環境を整える必要がある。

インクルーシブ教育をどのように盛り込むか？
それには聴覚障害者の文化・言語をしっかりと保障することが大切。

① 家族中心の支援

② 多職種の連携

(ライフステージの中で切れ目のない支援)

③ 多様性を認め合う社会を作る。

また自分はどのような聴覚補償が必要かを言い合える関係作りが大事ではないでしょうか。

★法人（社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会）から ～ 保護者の安心 = こどもも安心～



聴者の両親からの相談の場合、「両親は聞こえるのに、どうして聴覚障害児が産まれたのか。私が悪いのか。」という吐露から始まる方も多いです。

聞こえる保護者の多くは、身近に相談できる人がいないため、不安でいっぱいです。

聞こえに障害のあるこどもの育児ができる環境が整っていれば、保護者は安心して育児ができます。

保護者の支援はとても大切です。

乳幼児と家族の交流・つどいの場として「にじっこ」があります。京都府の「難聴乳幼児サポート事業」で、毎月開催しています。

「将来、こどもが手話を必要とする日がきた時に備えて、今から親も手話を覚えておきたい。」という保護者の希望で手話学習をしたり、目で見えて分かる伝え方の工夫を学習したり、就学や育児情報の交換をしています。

聴覚スクリーニング検査でリファアと診断された（専門医によって再検査が必要だと診断された）保護者の気持ちを受け止め、相談や交流できるところが求められています。

皆さんも「にじっこ」にご協力をお願いします。

★山城地域で取り組んだ「聴覚障害児デイサービス」 ～ 近所に友達が居ない ここには居る～

「南部に聴覚障害児が集まる場所が欲しい」との願いで2009年から聴覚障害児デイが始まった。山城地域は広くて、放課後に集まることができないので、夏休みと冬休みのみの開催となりました。

集まったこども達はそれぞれに、家の近所に補聴器をつけた同級生が居ない。でも、ここには補聴器をつけたこどもがいっぱい。

「僕だけじゃないんだ、嬉しい」

前は、夏休みになると、近所に友達が居ないから、お家でママと遊ぶ。出かけない。



だからパジャマで過ごすことも。

でも、デイがあると出かける。

すると生活にリズムができた。

“長い”と感じていた夏休みや冬休みを“短い” と思う様になった。 そんな声を聞く。

しかし2020年のコロナ禍で活動が難しくなった。皆んな今どうしているのかな。家で、学校で、保育園で、ちゃんと会話ができているのかな。

山城の聴覚障害児デイが始まって10年、利用者さんの声を集めた冊子を作りました。既に手にした仲間達からは色んな声が届いています。

皆さんも買ってね。

★聴覚障害児の親の立場から



～この先も 続けて欲しい～

こどもに聴覚障害があると分かってから、悩むこともあった。けれど、皆さんの取り組みが「私が悪いんじゃない」と安心させてくれた。

事業は法人に移行することになりました。しかし大切な集まりなので、今後も続けてほしい。

皆が安心できる支援と一緒にやっていきたい。

★山城ネット暮らしチームから

先程紹介があった児童デイの冊子には亡くなった福田さんの写真が載っていて、感慨深い。

福田さんに「あんたにも手話が必要やろ！」と言われたことがある。あれはとても愛のある言葉だった。忘れられない。

～まとめ～

医療、療育（福祉）、教育、多職種連携が
当たり前の社会を目指すことによって、聞こえない・聞こえにくいこどもを持つ保護者が安心して子育てできることに繋がり、聞こえない・聞こえにくいこどもが早期に療育・教育を受けられることになる。地域格差が生まれないように運動していく必要がある。

次の暮らし研修会「災害に備えて、いま、できること-2」は 宇治市 総合福祉会館です。

宜しく
お願い
致します。